

対象化の問題

—カントの構想力の概念に即して—

笠原克博

陶冶は、何らかの意味で新しい可能性の地平を開きつゝあるという所に成立する。それは現実性を自らによって可能性へと高めあげる操作において、あるいは現実性から可能性を志向するという様相において成立する。可能性の開示についてはその構造に関していくつかの特性をあげることができよう。現実との生きた触れあい、既存の観念の閉鎖性を破って、その外へ出ていき、現にここにあるものと未だないものとを共に視野に入れ、その多様性を新しい構造にまとめあげる、そうした主体的な行動連関に可能性の開示をみることができる。教育の場面では、「問題解決」という概念の中で、そうした特性の実現を求めてきた。それは「問題」という形で端緒をみせた潜在的可能性を開発し、それを一つの新しい全体へと構成し、全体を実現していく、そういう主体的、統合的な行動連関を表わす言葉であった。この可能性の端緒をどこに見出すかという問を、ここでは現実との生きた触れあいという言葉で表現できるような、対象化の地平の構造の解明によって解決したいのである。

可能性の開示、構造化の過程を「主体的」という言葉で表現した。これはまた自己否定、あるいは媒介といってもよい。それを自らを生成の最中に投げ入れ、自分自身を否定すると同時に、自らによって自らを回復し、新たな自己にたちかえる弁証法とみてもよい。このようにいうなら、この脈絡のうちで、われわれはヘーゲルの論旨を想起することになる。

この概念的思惟において、「命題は本質的に主語」であった。(註1) 表象からとりあげたすでに完成したものとしての主語に、同じ表象からとりあげられ、完成したものとしての述語を、矛盾律を最高の原理として外的に接合する、そうした

表象的思惟、見渡し(übersehen)の精神に対象の総体を捉えることは拒まれる。そこでは一つの主語に特定の述語を結合することの根拠は、あくまで恣意に留るし、のみならず、この操作をいかに累積したにしても対象が尽されたという感じもない。概念的思惟は、主語が自らを反省して述語の中へ移りゆく運動において内容を得る。同時に述語は、本質として、主語の性質を尽したのものとして、言明されているが故に、思惟はやがて述語の中に主語を見出し、述語の中に消え失せた主語が、再び、主語としてつき返される。つまりこゝで主語は自ら運動する概念の主体である。しかしこれが、自らを陶冶する精神の生であるとすれば、これは本質的には隔絶されている固定点の間の運動ではなくして、従って異質的なものを単に外的に接合する過程ではなくして、本質的には主語である思惟「自己自身を生み出し、進展し、自己自身にたちかえる行程」(註2) 这样一种内在的運動、厳密な自己同一性、従って主体性において成立するのである。常に全体を見渡し、「自らは自らが語っているものを超えた所に立っている、」そのような表象の地平ではなくして、「対象の生に身を委ね、」「その中に身を沈める」(註3) 所にこそ主体性が、そして自ら陶冶する精神の生がある。

陶冶する精神は、自己の前にひき据えられた自然の法則的確実性の根源でも、また存在に対して理念を示し、当為を投げかける倫理的本質でもなからう。それはむしろ自らを自らによって無にしてする内在的な自己発展の生でこそあろう。

カントの場合、その「総合」の問は自然一般の理論構成に関わる限りにおいて、血も肉もない形骸の構成を結果したかもしれない。その自然も、そしてまたその成立の根源である主観も自らを

展開する具体的存在ではなくして、単に法則的に構成された自然、単に理論的本質たらしめられた主観でしかなかった。倫理的領域においても、その理念は現実性を遠くかけはなれた所から、当為を呼びかけるにすぎない。正に「現実性を手に入れるには余りにも貧しい理念」でもあった。要するにこゝでは具体的、生命的存在を「本質」へと抽象してしまうことになるのである。

なる程、カントの体系を支配しているものは抽象的本質性であろう。しかし、こゝでは対象に対するに綜合していくという課題を負わされた有限的なる人間悟性を自覚する限りにおいて、人間存在を必然的な世界の中に編み込むことから救うのである。ヘーゲルの場合、その精神は発展していく精神である。しかし一切の生成を自らのうちに止揚し尽す精神は、やがて絶対的真理によって自らを締めくくりに、そこに完成され、与えられ終った終末を歴史の中にもち来たしてしまう。志向すべき未来であるよりは、現実化された未来の中に一切の可能性が消滅してしまう。現実性が直ちに可能性であり、永遠化された現在の中で人間存在は必然性の中に解消されてしまう。現実性と可能性の分裂、乖離こそが有限的存在の徴表であろうし、そこにこそ可能性の源泉があるといえよう。その意味でこの分裂、乖離の意義がこゝでの問題であるともいえよう。換言すればそのことは自己否定の本質をどこに見出すかということに他ならない。かくしてこゝでは対象に対するに綜合という課題を負わされた有限的存在の次元において、そして、この対象に対するあり方に可能性の源泉を求めようとするのである。すなわちこの対象化というあり方の中に自己否定の契機を認めつゝ、現実との主体的な触れあいの構造を認めたのである。

1

論理が自証的、必然的な第一命題の上に形成さるべきであるなら、そうした命題として $A = A$ 程、その要求を充たすものはない。有るものは有り、無いものは無い。これは端的に明証的なものとして第一におくことができる。しかしもしこれを発展、拡張という観点からみるならば、それ

は無内容、さらには無意味ですらある。発展、拡張が要求するものは単なる説明、分析であるよりは互いに異質であるもの、夫々の閉鎖性を破り、その間に公道を設置し、これらを同一の体系中に包摂していく綜合の操作である。このような綜合する知、拡張する知の自覚を、カントは「先天的綜合判断はいかにして可能であるか」の問に集約するのである。そのような拡張する知、自然を構成する論理が先験論理学に他ならなかった。先験論理学は、その意味で対象へとさしかけられ、それを扱かう論理学であった。かくしてわれわれはこの可能性開示の構造の解明にカントを手がかりにするのである。であるならばカントにおいて対象化はいかにしてなされたであろうか。

このように問うことには問題があるかもしれない。というのはカントにおいて感性と悟性は認識にとって必然的な「二つの幹」「二つの源泉」としてすでにおかれていたのであり、その問は、それ以後に、すなわちこれら二つのものがいかにして親和するかにあったからである。尤もこの二つの幹に「一つの共通の根」の存在が示唆されることはあったし、そのことが彼の念頭にしばしば上っていたであろうことを推測することもできる。(註4) そしてまたハイデッガーのカント解釈の如く、このことからして、単にすでにある抽象的な感性の形式と悟性の論理的必然性であるよりは、その間に「根源的に結合する」構想力を考え入れ、これらの根源としての先天的綜合の次元が追求されることもあった。それが二つの幹の共通の根である限りにおいて、その「根源的に豊かな全体」(註5) から、二つの幹の発生が考えられていたのである。勿論われわれはこのような直観的で、生命的な姿におけるカントの体系を、そのまま認めることはできない。というよりむしろカントがたとえそのような「共通の根」の存在を念頭においていたことを認めたにせよ、この共通の根が「分かれて二つの幹をなすところから出発する」(註6) という言葉に忠実に従うべきであろう。つまりカントの中に対象化の構造の解明をみようとしてみるにしても、そのことは決して根源的一者から二つの幹がとり出されてくる仕方を期待しているのではない。少くともそれが「二つの

幹」の後からの綜合を課題にしていこうとしていることは認めておかねばならない。

しかしそれでいて、その体系を単なる形式的論理主義として、そしてまた先天的綜合判断への問を、現象に対置せられる汎通的同一の意識たる“*Ich denke*”を演繹するものとしてみることもできない。尤もこのような形式性はたしかにカント自身に本来的なものではあった。ヒュームにとって二つの觀念の結合は、それら二つの觀念の印象の生じ方の問題に還元されてい、従ってその結合は主観的親和性でつくされ得た。その結論はたしかに独断論者をしてその微睡から覚醒させるに十分であったし、カントにとっても一時の休息所と永住すべき居住地とが異っていることを明確に区別させるものでもあった。しかしまた他方、単なる懷疑に留ることは許されない。しかしして精神の積極面への問は精神についての *history* をたどる経験論の地平を超えて意識の必然的統一の高みから見直す必要に迫られるのである。すなわち「経験的親和性は却って逆に先験的親和性の結果である」というようにヒュームの思考の方向を逆転することになる。であるならば「統覚の先験的統一とは直観に与えられた総ての多様を客観の概念に結合するための統一である」(註7) という言葉を単に「総ての直観がそれに従わねばならない」(註8) という論理的統一の問題として解釈し、それに対して他方、知覚の成立にも統覚の綜合統一が「働いている」という働きの主体としての統覚の意義を無視することも可能ではあろう。このようにカントをみれば、こゝでは単に汎通的同一の意識一般としての、あるいは対象一般可能の制約としての悟性をそれ自体としておくことになり、静的な姿で論理的統一性と感性的多様が、夫々すでにあるものとして対立的にみることになる。

しかし先験論理学が対象へとさしかけられた論理である限り、それはこのような論理主義のみによってつくされるであろうか。もとより直観主義へとそれを還元するのではないにしても、綜合へと働きつゝ、自らを実現していく論理的主体、そしてそれに即して対象一般可能の制約を実現していく働きの主体をそこにみることは許されないで

あろうか。換言すればそのようにして対象性そのものを実現するという様相において先験論理学を捉えることができないであろうか。

対象との触れあい、そしてそれをさらに自己否定といった様相にまで近づけるとするなら主観と客観は単なる「異質的」には留り得ない。それはやがて「反立的」としておかすべき段階への高まりを期待しなければならない。可能性は、単に異質的であるような他者が反立的として自らにせまってくる次元においてのみ開け得るであろう。このような意味で対象化の問題を捉えていきたい。それは始めから主観と客観という実体をおき、後からそれらを外的に結合する一面主義、単に客観を眺める見渡しの次元にはあり得ない。しかしこゝでの論議がカントに関わる限り、あくまでも対象と主体との触れあいを「異質的」とするところに出発点をみななければならない。とはいえカントの対象性は唯単に異質的な二つの実体の接合を考える一面主義であり、自然への見渡しの地平に留っていたであろうか。そうではなくして働きの主体という面、そしてその働きを通じて対象一般可能の地平を開く過程に、力動的な対象化形成の姿をみることはできないであろうか。

2

「感性と悟性という両極端は構想力の先験的機能によって必然的に結合しなければならない。」(註9) しかして「内官は悟性それ自体によってではなくして、“われわれ”にまで、すなわち“私”によって触発されるのである。」(註10)

悟性は元来、「対象一般の概念」として汎通的同一の意識であると共に、感性の「受容性」に対して「自発性」をその本性とする。この統一性と自発性という本性によってこそ、それは法則的自然の根源である自らを基礎づける。しかしてまた悟性は、その自発性を構想力を介して内官において自らを限定しつゝ、実現し、そこに時間、空間が直観そのものとして先天的に表象せられてくる。つまり統一性が直観と共に与えられ、かくすることにおいて対象可能の制約の地平が形成される。このことが可能になるのは構想力を介してに他ならない。正に「悟性は綜合として触発の欠如

を充たすために、半ば感性的である構想力を使用しなければならない」(註11)のである。

しかしこのようにいう時、一つの問題を解決しておかねばならない。というのはこの「自発性」が構想力のものであるよりは悟性そのものの本性であるという叙述に接するからである。すなわち「前部では(経験的なる覚知の総合においては)構想力の名において、後部では(統覚の総合においては)悟性の名において直観の多様に結合をもたらすものは一つの同一の自発性である。」(註12)あるいは「悟性は構想力の先験的総合という名の下に、悟性はその能力であるところの働きを受動的な主観に対しておよぼすのである」(註13)というように。前者では「構想力という名における自発性」と「悟性という名における自発性」が同一であるということが、後者では「悟性」が「構想力の先験的総合という名において」内官を触発することが示される。とするならば、こゝで構想力は単に二義的であり、「自発性」はより根源的なもの、あるいは本来悟性のものであるであろうか。「こゝでは(第二版では)総ての認識を基礎づける純粹構想力はもはやなく、Ich denkeの機能がそれである。構想力のかの特性——自発性という特性をIch denkeの機能からうけとる。」(註14)という解釈が出てくるように。であるにしても悟性は、その全能力が思惟ではなかったであろうか。

この疑問はまた「結合は全く悟性の働きである。そして悟性はそれ自体先天的に結合する能力以外の何物でもない」(註15)として構想力から「退却」する叙述の問題にも通ずる。しかるにこのような問題に関してわれわれは「知的総合」と「形像的综合」の区別を手がかりにすることができる。すなわち後者が構想力の先験的総合であるに対して、前者は「単に統覚の根源的統一」であり、「範疇において思惟せられるところの先験的統一である。」(註16)この限りにおいて「知的総合」は構想力の助けを借りることなく、悟性のみによってなされる働きである。この区別はまた「結合」のそれ——「合成」Zusammensetzungと「連結」Verknüpfungの区別にも対応する。前者が相互に必然的關係をもたない多様の結合で

あるに対して、後者は先天的に結合しているものとして表象される多様の結合である。かくして「形像的综合」、「合成」が共に先験的でありながら内官において継時的に、可直観的形像へと結合していかれるに対して、「知的総合」「連結」はそれ自体としての「総合」「結合」——いわば「総合性」「結合性」であるといえる。つまり結合が「全く悟性そのものの機能である」といった時、その結合は、後者の意味——「結合性」においてであるということができる。

同じようにして「一つの同一の自発性」の問題も考えることができる。先験的統覚を演繹するというカントの仕事はいうまでもなく自然から法則を汲みとる主観であるよりは、却って逆に自ら「自然の立法者」であり、自らをその中へ投げ入れられることによって「現象における秩序と法則」である「自然」を成立せしめる主観を確認することになった。このような意味での法則的自立性として、こゝでの一つの根源的な自発性を解することができる。であるならば、これは自らを投げ入れていくという機能している主観、そういう意味での「自発性」はなおあくまで構想力独自のものとして保留することができよう。カントの仕事が一義的には、綜合一般、自立的なる法則的主観を演繹することにあつたのは明白である。しかしこゝにそうした根源的な、もしくは超越的な論理的必然性としての「私」が時間の中へ、自らを制限しつつ、実現する、そしてそこに対象一般可能の地平を開く、この過程の意義もまた積極的に明るみに出されねばならない。この自らの制限と実現の相即というところにこそ自発性と受容性の遭遇と親和の秘密があつたのである。しかしてこの過程においてわれわれは対象性の地平、その成立の構造をみることになるのである。

3

この解明には図式論があてられる。こゝで超越的な論理的必然性が時間の中に自らを制限しつつ、実現し、同時に直観を直観そのものとして成立させ、やがてそこに構成されてくるべき対象の先天的表象を現在にもち来たすのである。しかしてこのような図式性は秘められた仕方でも働く構想

力の手続き他にならない。

第一版で説明の為にではあったにしても、積極的にとりあげられた再生的構想力の概念は、第二版において、心理学の課題であっても先験哲学の範囲外のものとして明白にとり除かれた。第一版では、一つの表象の外へ出ていき *hinausgehen* そこで多様を結合するという総合の過程の解明を積極的に行なっていた。またそこでは多様の表象の生起そのものに関しても「それが現存しない時にも対象を直観にもたらし」構想力の意義がとりあげられていた。それに対して図式論においては未だない、やがてそこに構成されてくるべき可能的対象の地平を形成する構想力の働きが示される。そしてより積極的なその働きは、判断力のそれとして開示される。すなわち悟性、「規則の下に特殊を包摂する」作用のうちに図式性は開示される。構想力は、元来それ自体「盲目的」で「その働きを赤裸に示し得ない」といわれる直接的な、その働きには何らの論理性も含まないような前論理的能力であった。盲目なるが故に、その働きには統覚の先験的働きが加らねばならなかった。

しかし同時に、それが判断力として、超越的な論理性を時間の中で限定させながら特殊を普遍に包摂する場合、それは原論理的として姿を現わすのである。このように構想力の意義を認めるならばそこから先験的統覚の本性も捉えられてくる。

先験的統覚としての「私」は汎通的同一の意識であり、そうした「私」の存在の演繹が、第一批判の基本的目的であった。しかしこの「私」が単に抽象的な自己同一性として存在するのではなしに、そんな貧しい形式としてのみあるというのではなしに、働きの主体として自らを実現しつゝあるというその姿をみせるのは、この現存しないものを現在にもたらしという構想力によるといえる。法則的に自立的なもの、そして「全可能的な自覚」が先験的統覚であった。しかしこのような自立的で可能的なる主観が、単に存在するというのではなしに、自立的として、また可能的としてそれ自身を自覚する、そういう先験的統覚の意義を、この構想力の概念を通じて確認することができる。

所でこのような普遍の実現は、同時に自らを制

限することによってなされる。先験的統覚の演繹というカントの仕事の半面は、汎通的同一の意識が内容に関しては空虚な、全く貧しいものであることを、そうしたものとしての有限的な思惟の本性を示すことであった。自ら内容を産出し得ずして、受容の必然性を負わされたものが有限的悟性の本性である。汎通的同一の高き意識も、対象一般可能の制約として、自覚するのは感性の低き意識において自らを制限する限りにおいてのみである。この制限の手続きがとりもなおさず自らを実現する過程であることに自発性と受容性の結合の秘密があった。この実現と制限の相互性において、直観そのものと共にある統一が成立するのであり、それがまたとりもなおさず、現にあるもの以上へと可能性の地平を開示する姿でもある。

このように構想力の働きを捉えながら、二つの幹がすでにあるというのではなくして共にあるという仕方で成立してくるといったにせよ、カントにおいてこれらが端的に一なる根源においてみられていたというのではない。むしろ「実現」と「制限」という言葉を強く「相互性」として捉えようとすることも、この本意を逸脱しているかもしれない。カントにおいてこの二つのものは単に異質的であっても反立的ではなかったかもしれない。しかしこゝでこの二つのものが「総合」さるべきであるというなら、あるいは親和していくという働き、動きの中で捉えらるべきであるなら、これらは夫々それ自体として単に区別されているというに留らずして、むしろその間の様相を両者の遭遇という性格においてみるべきであろう。この意味で直接的に働く構想力の意義を積極的にとりあげることを通して、理論的本質としての主観を働きの主体として把握しようとしたのである。構想力は普遍と特殊、あるべきものとあるもの、そういう両者の間に介在しつゝ、後者を前者に包摂させ、前者を後者に限定させ、そこに可能的なる経験の地平を開く。こゝではあるべきものとあるものが共に相互性の中で夫々自らを示してくる。普遍性が時間の中で特殊化され、特殊性が普遍性の中に包摂せられる、そうした両者の緊張の根源が、その構想力の中にあるといえる。

単にそれ自体としておかれた主観は無規定的な

るものとして、無限の自発性、能動性である。この無規定的なるものとしての能動性が障害によってはねかえされ、折り返し、*reflektieren* しかして自らを限定するところで自覚する。また障害として、限定的なる特殊としてのみ成立する対象が、対象として可能であるのは、このようにして受容する主観との連関においてのみである。単に区別されておかれるのみの主観、客観が抽象的であるとすれば、このような意味での相互性においてのみそれらは具体性を得るであろう。そして自らを実現しようとしてはね返され、それでいて自ら能動的である限りにおいて、再び前方へと向かう主観、そうした動揺する最中にある能力として構想力がある。単に規定するものとしての法則的主観と、無規定的なるものとしての客観が、その場面で具体的なものとして現われてこようし、そしてその動揺の最中こそが、未だない可能性を開示する姿であるといえよう。

主観、客観を反立的なものとし、これらの区別と遭遇、そういう相互性の中により以上のものをみようとすること、あるいはそうした言辭は、カントよりはフィヒテのものである。二つの反立しあうものを合一、綜合せんとする要求と、それをなし得ない不能の間の斗争において動揺する精神は「諸能力のうち、最も驚異すべき能力」(註17) としての構想力であり、それによって消失せんとする偶性を総体として把握することになる。こゝに実在性を産出する構想力、そして実在としての主観と客観の合一をみることができ。しかし、われわれはこゝで、そういう根源的な合一そのものの把握であるよりは、そうした二つのものの遭遇の中から開かれ企投されてくる可能性をとりだしたいのである。

4

不断に可能性を開きつゝあるということに陶冶

註

- 註1 Hegel, G.W.F. *Phänomenologie des Geistes* S. 60
 註2 *ibid* S. 60
 註3 *ibid* S. 50
 註4 Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft* A. 29. *Anthologologie* §. 33
 註5 Heidegger, M. *Kant und das Problem der Metaphysik* S. 59
 註6 Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft* B. 863
 註7 *ibid* B. 139
 註8 *ibid* B. 138
 註9 *ibid* A. 124
 註10 Cohen, H. *Kommentar zu Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft* S. 61
 註11 *ibid* S. 61
 註12 Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft* B. 161
 註13 *ibid* B. 153
 註14 S. 110
 註15 Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft* B. 134
 註16 *ibid* B. 151
 註17 Heidemann, I. *Spontaneität und Zeitlichkeit* *Kantstudien* 1958
 註18 Fichte, J. G. *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre* herausgegeben von Medicus S. 398

の本性をみ、その可能性の源泉を対象を対象として、従って主観が主観として現われてくる地平——対象化の地平にみた。そこに構想力という直接的な能力が介在するのであり、その根源のうちから可能性が企投される。すなわち主観と客観の相互性、というより相互の斗争、そしてそこで動揺する主観の能力の中に可能性の開示をみてきたのである。

ものとしての対象に、われわれがつきあたる、そうした意味で生きた接触をもつところに可能性の開示がある。しかしてこの生きた接触ということの本質的契機を構想力という直接的な能力に認めたのである。この間に介在するものは、単に眺め、あるいは抽象的、一般的に構成する論理性であるよりは、むしろつきあたり、反対し、はねかえされ、さらにこれを克服していこうとする身体を含む全主体である。換言すれば単に抽象化し、必然性の形相へと事象を還元する、単なる知であるよりは、よりパトス的なもの、前論理的、原論理的といわなければならないような構想力である。単にロゴスという必然性は必然性である限りにおいて歴史の特定の時点を超越した抽象的本質としての人間性を前提する。カントの理論的本質としての主観はすでに、そのような抽象態であったかもしれない。しかしそれが綜合へと働く主観をもちだした時、必然的であったものが、この構想力の概念であったということは認められる。可能性を開示し、陶冶を実現する主観、客観の構造は単に理論的集積としての個々の現象であるよりは、「一つの事実」、あるいは形相であるよりは質料と、主観の全存在との交わりあいのそれであるといえる。それをこゝでは構想力という直接的な能力を介してする限定と実現の相互性、そして両者の遭遇という様相においてみよとしたのである。